備陽史探訪
第86号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL.(0849)53-6157

# 銀行の話

田口 義之

バブルの崩壊以来、金融の危機が叫ばれて久しい。商取引に「マネー」が使われる限り、銀行は無くならない。いや、この人間社会が続く限り、銀行は必要だろう。

## 我が国の金融略史

金品の貸借を金融と呼ぶならば、それは古代にも存在した。古代の税制は「租庸調」として知られているが、実はそれ以外に農民は「出挙」と呼ばれる国家の強制的な米の貸付を受けなければならなかった。春、農民は国から割り当てられた籾を借り、秋の取り入れ後にはそれを五倍から十倍にして返したのだ。返済できなければそれは負債となった。この出挙こそ古代国家の隠された重要な財源だった。

時代が下り、「銭の病」が流行したという鎌倉時代になると、金融は社会の重要な要素となる。鎌倉時代と言えば、武士が世の中の主役として登場した時代だが、幕府の記録を紐解くと、その後期には「御家人の窮乏」が重要な政策課題となっている。原因は御家人が「借上」と呼ばれる金融業者から銭を借り、返せなくなったあげく、彼らの所領がどんどん金融業者の手に渡っていったためだ。ここで出されたのが借金棒引きの法令として有名な「永仁の徳政令」である。しかし、この法律は数年後には廃止された。この法律によって借上は御家人に金融を渋り、御家人がかえって困窮したためだ。

次の室町時代になると金融業者は社会の中で益々重要な位置を占めるようになる。彼らは土蔵造りの立派な蔵を建てたことから「土倉」と呼ばれ、米銭の貸し出しはおろか、元手を広く募って利子を付けて返済した。立派な銀行業務と言って良いだろう。土倉の経済力は大変なもので、幕府政所の年間経費六千貫文は京都の土倉が負担した。当時来日した朝鮮の通信使も、室町幕府の財政は富商（土倉）によって支えられていると帰国して国王に報告している。

江戸時代になると、これに両替業務が加わる。この時代は奇妙なことに日本の東西で流通した貨幣が異なっていた。東は「金」で西は「銀」であった。こうなると両者の交換比率が問題になる。両替商は刻々と変わる金銀の両替相場を見ながら利ざやを稼いでいった。さらに後期になると全国の各藩で「藩札」の発行が盛んになる。藩札は発行された藩内だけで流通する紙幣で、各藩の御用商人が藩に代わって発行を引き受けた。わが福山藩が藩札発行の先進藩であったことは有名である。藩札の発行を引き受けた商人は、今日の為替業務とほとんど同じ業務をこなした。各藩の財政状態によって藩札の価値は変動した。下手に取り引きすると大損だ（実際藩札の価値は時代が降るとともに下落した）。

こうして見ると近代銀行が出現する以前、すでに日本人はその業務のほとんどを習熟していたわけで、これが明治になって「銀行制度」がスムーズに社会に受け入れられた理由である。

## 義倉と第六十六銀行福山支店

近代以前の銀行として、まず挙げなければならないのは「義倉」である。義倉は、御存じのように文化元年（一八〇四）深津郡千田村（現福山市千田町）の河相周兵衛、品治郡戸手村の信岡平六、福山城下の神野利右衛門等によって、窮民の救済・学問の普及を目的として設立された一種の「社倉（飢饉に備えて米穀を貯蔵した結社）」である。

義倉が江戸後期各地に設けられた社倉と違った点は、自らが「義倉田」という救米を確保するための田畑を保有し、その購入のための資金を得るため、金融業を営んでいたことである。義倉の融資する資金は「義倉銀」と呼ばれ、一般の高利貸しより低金利であったため、利用者も多く、福山地方の金融機関として大きな意味を持っていた。貸付金には義倉自身の資金の他、旧福山藩領一円から募った「預り金」が充てられ、預り金には利息が付くことから、義倉は福山地方の銀行としての役割を果たしていた。

しかし、義倉の「銀行」としての役割は明治二十六年（一八九三）に終了する。同年「銀行条例」が施行され銀行以外の銀行類似行為が禁止されたためだ。ちなみに、義倉は明治三十二年（一八九九）財団法人となり、今日も我が郷土で産業の振興・学問教育の普及に大きな役割を果た

しているのはご承知の通りである。

福山に出現した最初の本格的な銀行は第六十六国立銀行福山支店である。第六十六国立銀行は、渋沢栄一の「国立銀行条例」によって、明治十一年(一八七八)、尾道に創設された銀行で、当初の資本金は十八万円。同十六年(一八八三)十一月二十日、西町新馬場にその福山支店がオープンした。同行としては大坂・広島に次ぐ三番目の支店で初代の支配人は岡村詮次であった。

同支店の営業状況は極めて順調で、明治二十五年(一八九二)度の預金貸金の合計は預金十一万円余、貸金十三万円余となっており、尾道本店に次ぐ成績を上げている。同行はその後明治三十年(一八九七)一月、株式会社となり、大正九年(一九二〇)芸備銀行、昭和二十五年(一九五〇)広島銀行となり今日に至っている。

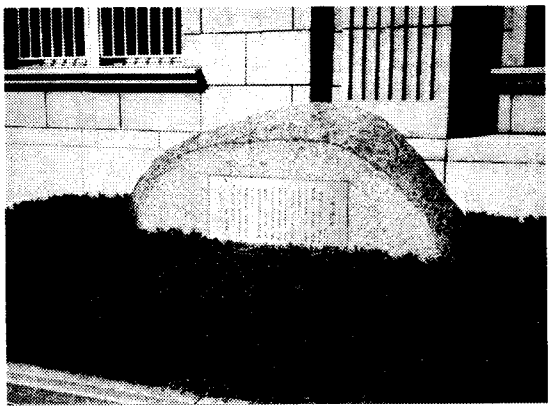
第六十六銀行の営業成績を見ていくと、明治三十年を境にして、同行広島支店が本店に次ぐ成績を収めるようになる。これは日清戦争によって軍都広島が活況を呈すことになったことにもよるが、福山に「福山銀行」を初めとする地元資本の銀行が続々と設立されたためである。福山銀行は、明治二十九年(一八九六)四月一日、船町の現中国銀行船町支店の場所に設立された銀行で、当初の資本金は三十万円。取締役会長として藤井与一右衛門、専務取締役として河相三郎・斜森保兵衛等当時の福山財界の錚々たる顔ぶれが名を連ねている(『福山市史』下巻)。

## 貯蓄銀行と穀蓄合資会社

銀行の話を続けよう。先に紹介した福山銀行に続いて福山にオープンした銀行は、福山貯蓄銀行である。同行は明治二十九年十月十五日、資本金五万円で開業、行名に「貯蓄」とあるように、主に零細な預金を資金として運営された。当初の頭取は河相三郎で、取締役として藤井与一右衛門・斜森保兵衛などが名を連ねている。

また、同時期松永で開業した穀蓄合資会社も立派な銀行であった。同社は松永の大地主石井四郎三郎家を中心とした石井一族が経営した金銭貸付・預金等を行った銀行類似会社で、その設立は明治十四年(一八八一)とも同二十年(一八八七)とも言うが、福山銀行や福山貯蓄銀行同様、明治二十九年一月、大蔵大臣より銀行事業営業認可を受けて合資会社となった。資本金は二万八千円余で、当初の社員は十二名であった。

こうした銀行は地元資本で運営されただけに景気の変動で浮沈を繰り返した。例えば、福山銀行の場合、当初順調であった経営も明治三十年代の不況で大きな打撃を受け、同三十六年(一九〇三)には「債権上大ナル損失ヲ生シ…其損失ヲ補充スルニハ資本ヲ減額」と言うことで資本金を三十万円から十八万円に減額している。これは株主にとっては大きな痛手で、ある株主は「誠に残念である。今後は注意して地方株は持つべきでない」と記録に残しているほどである(『福山市史』下巻)。



中国銀行福山船町支店の前に建つ福山銀行跡の石碑

地方の資本家にとって銀行を持つことは潤沢な資金を得る有力な手段であったが、好不況の波をうまく乗り切れなければ、破産という最悪な事態を迎える場合もあった。松永の穀蓄合資会社の場合、明治三十九年(一九〇六)の決算では純益金一万八千円余と順調であった経営も、社員の中に他事業に手を出し失敗するものが現れると、たちまち経営は破綻し、大正三年(一九一四)十月には営業を停止してしまった。石井家ではこの状態を打開すべく努力したが、いかんせんその貸付金の焦げ付き高は二十三万三千円余という膨大な金額に及び、同家の不動産二十八万七千円余を提供することでようやく後始末を付けている。このためさしも隆盛を誇った石井本家も破産状態となってしまった(同上)。

## 恐慌と銀行界の再編

日清・日露の戦争に勝ち抜き、帝国主義列強の仲間入りを果たした日本は、経済の上でも目覚ましい発展を遂げた。維新当初、輸出産業と言えば僅かに「絹」や「茶」しかなかった我が国は、新政府の富国強兵政策によって重化学工業も順調に成長し、二十世紀を迎える頃には、海軍の艦艇もほとんど国産できるようになった。

第一次世界大戦の勃発はこの情勢に一層の拍車をかけた。英・仏・独の欧州列強は総力戦に突入し、海外に製品を輸出するどころか、自国の軍需品の生産にも事欠く始末。大戦に突入すると、それまで蓄えていた弾薬がわずか数日で底をついたというのだから、近代の総力戦の消耗は凄まじいものがあった。日本はこの大戦でアメリカと共に連合国側に味方し、その後方補給を受け持った。前線で鎬を削る英・仏に、日用雑貨から弾薬・軍艦まであらゆる工業製品を輸出したのだ。アメリカが「世界の工場」として確固たる地位を築いたのはこの大戦であったし、日本もまたこの大戦によって資本主義国としての地位を固めた。

しかし、第一次大戦が連合国側の勝利によって幕を閉じるとその反動もまた凄まじいものがあった。大戦が終わると英・仏は再びその植民地政策をすすめ、大戦中失った市場の回復を目論んだ。それに対して日本には拡大した生産設備から生産された工業製品を販売する市場がなかった。日本の国内需要は農村が地主制によって生活水準が押さえられていたため需要が少ない。勢い製品の販路を海外に求めるしかないが、多くの地域は欧米列強の支配下にあって日本製品を買ってくれるところは少なかった。つまり、資本主義国としての日本には欠陥があったのだ。この後日本は侵略戦争に突入し、太平洋戦争の終末まで人々は塗炭の苦しみを味わうことになるが、それは地主小作制という封建的な旧制度を改革することなく、資本主義列強への道をひたすら追い求めていった為だ。

それはともかくとして、大戦後の日本経済は「寡占」によってこの不況を乗り切ろうとした。三井・三菱・住友・安田などの財閥が益々肥大していったのはこの時期だし、銀行が現在のように全国規模の都市銀行と、一県規模の地方銀行に再編されたのもこの時代である。そして、この銀行再編成は、大蔵省の強力な指導によった。

福山地方でも、大正十五（一九二六）年三月、県知事が福山地方の土着七行の代表者と県庁で懇談し、尾道銀行を除く六行が「合同」に賛成している。この「懇談」が大蔵省の指示を受けたものであることは言うまでもない。かくて、大正五年（一九一六）には三行（福山・福山貯蓄・桑田）あった福山に本店を有する銀行が、昭和九年（一九三四）には一行もないという状況に立ち至るのである（『福山市史』下巻）。

## 中世文書に残る山城の息吹
# つわものどもが夢の跡　火野目山城調査記

城郭研究部会

はずみがついてこの一年の間にとうとう五十近い山城に登った。城といっても、谷の出口にまるでお供え餅のように郭を二、三重ねた小さな館城から、何十という郭を連ね、全山要塞化した巨大なものまで様々である。

誰しも命が惜しく、かつ権威を示したかったのか、それぞれに趣向を凝らしているところをみると、正しく「つわものどもが夢の跡」である。どんな夢と権威を求めたのかは知れないが、それぞれ然るべき口碑伝承を伝えている。しかし、はっきりとした中世文書に裏付けられる城は数が少ない。

世羅郡世羅町大字賀茂と賀茂郡大和町の境にある火野目山城は『世羅郡誌』によれば、一応は「賀茂にあり居者不知」としながら、註として「建武三年十月十一日三善佐賀寿丸代藤原光盛言上書に『九月四日竹内爾次郎小早川掃部青目寺別当弁坊以下之凶徒乱入津口荘内賀茂郷而焼払（賀茂郷一分地頭山内七郎人道）観西住宅』とあり（後略）」

と記し、その住宅は不明であるが、頭畑城かこの火野目山城のどちらかだといっている。しかし、現地の位置等の地理的条件、さらに城の規模構造からみて頭畑城とは思えない。『日本城郭大系13　広島・岡山』は、「賀茂郡大和との境界付近にそびえる標高四六〇mの独立峰を利用した山城で、前新原・後新原・福田方面の耕地を望む。城主については詳かでないが、津口荘賀茂郷一分地頭である山内七郎入道観西と思われる」

として、「山内家文書」にある前記の建武三年（一三三六）の竹内弥次郎以下の侵入した戦いを記し、

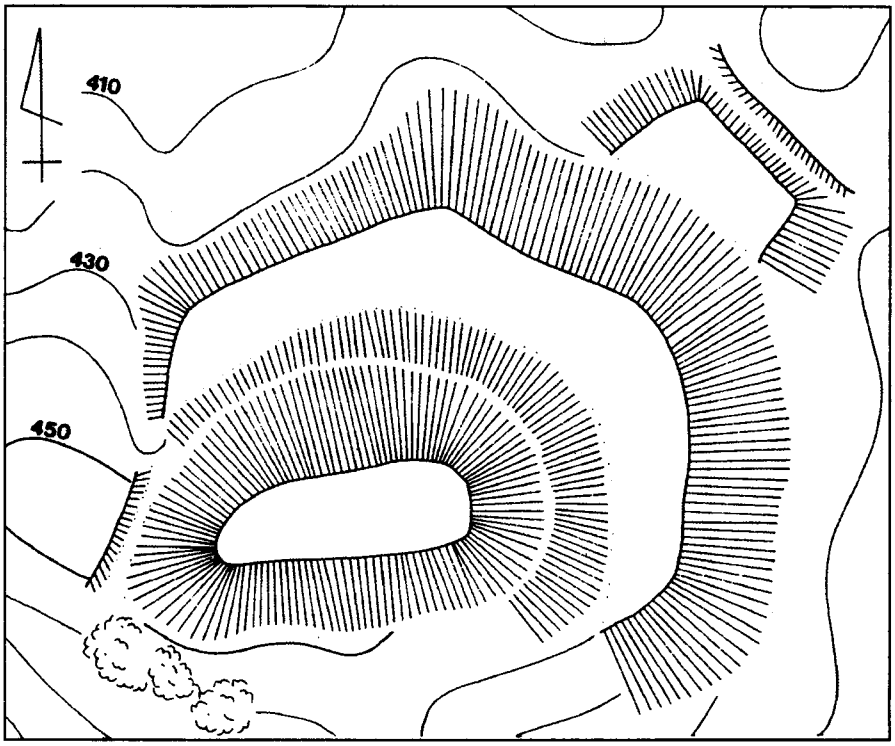
「観西の屋敷は本城の東南の府内という地に高さ二mの土塁を残す屋敷跡があるところからその地と考えられる」

と結論付けている。

建武三年の戦いというのは「山内家文書」五三八号の足利尊氏御判御教書に

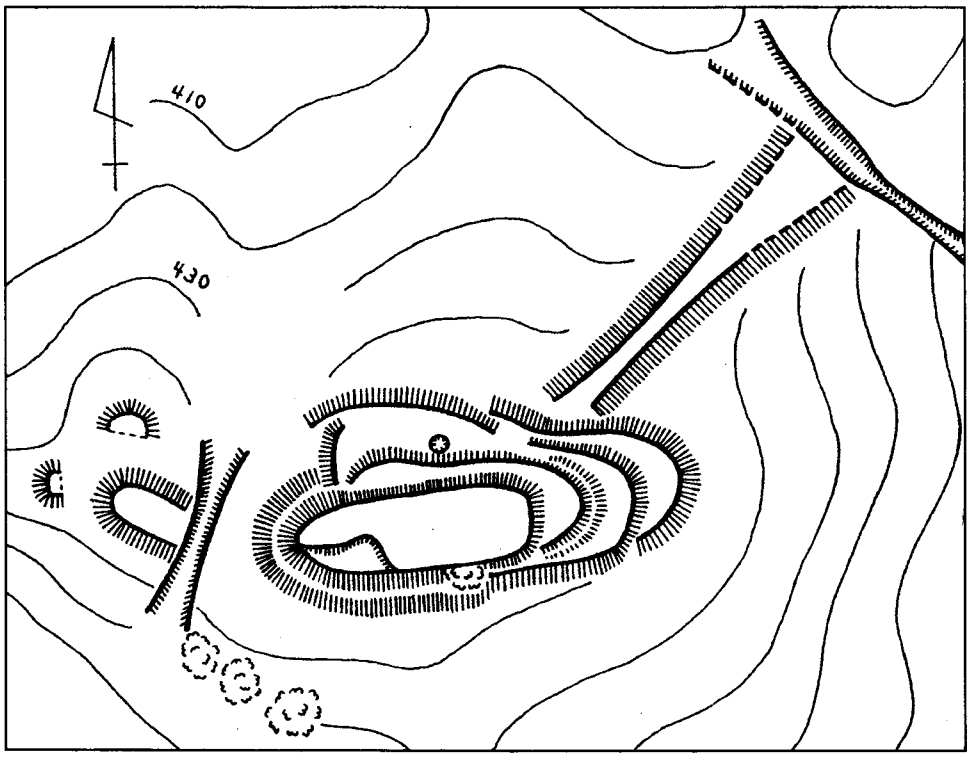
「備後国凶徒竹内彌次郎兼幸楯籠有福城之由、有其聞、早令発向、可追討之条如件　建武三年六月十一日」

# 火野目山城跡　（日野目山城跡）　世羅郡世羅町賀茂




火野目山城跡略測図（S＝1：2,000）

現状　山林　保存状況　一部壊　立地　丘陵頂部　標高　四六四m　比高　七〇m




火野目山城跡略測図（S＝1：2,000）

（測量）出内　小林　坂本　佐藤　（図）小林

とある「津口山内一族中」宛のものである。文中の竹内兼幸は土肥実平の子孫とされ、備後で桜山茲俊に次いで挙兵したといわれており、在庁官人として金丸名など備後東部に勢いを張った甲奴郡の土豪である。

この時は山内氏を中心に、甲奴で竹内と対立する長谷部信仲や太田荘地頭太田佐賀寿丸等武家方が、各地の宮方（南朝方）と約四ケ月にわたる戦いを繰り返している。その概要を「山内家文書」でみると次のようである（現代語訳して要約）。

（五三九号）山内観西軍忠状写

（建武三季七月十八日）

凶徒の追討合戦で戦死、負傷者公御証判をお願いします。当国則光西方城において、中黒幡（新田氏の旗）を掲げて敵が蜂起した戦いで、若黨真室彌次郎が負傷し、中間宗四郎が戦死しました。御実検の上、早く御証判をお願いします。

この則光西城は現在は賀茂郡豊栄町であるが、元は世羅郡吉川村の龍王山城である。

（五四〇号）長信仲軍忠状写

（建武三年十月十日）

去る七月十五日、則光西方城郭において小早川七郎・石井源内左衛門入道以下の凶徒が楯篭もったので、山内七郎入道観西と共に押し寄せ、十七日夜半、御敵を追い落した時、中間惣四郎が戦死し、若黨真室弥次郎負傷。同八月晦日、当国竹内弥次郎兼幸・小早河掃部以下の凶徒が蜂起したので、御調之広瀬へ馳せ向かい、終日合戦した時、中間藤五郎、人夫一人討たれました。同九月四日又竹内弥次郎・小早河掃部助、青目寺別当弁房以下の凶徒太田荘・津口荘へ乱入したので、太田と重永堺へ馳せ向かい、数刻合戦した時、中間二人負傷しました。同廿七日重永城を落としました。若し偽申せば、日本国中の大小の神々の御罰を蒙ります。偽りはありません。正式にお認め下さい。恐惶謹言。

（五四一号）大田佐賀寿丸代藤原光盛軍忠状写

（建武三年十月十一日）

右七月十五日（以下、五四〇号文書と大要同じ＝略）九月四日（中略）津口庄内賀茂郷に乱入して観西住宅を焼き払いました。将又、大田圧に討ち入りました（以下、五四〇号文書に同じ）。

大田佐賀寿丸は地頭三善康信の子、康通（桑原方）の系統で、貞宗ではないかといわれている。この当時、守護代武田信武が近畿出陣中で、南朝方の万里小路継平、備後の大将吉田高冬、石見の福屋弥太郎左衛門尉などが、すきを狙って討ち入ったものと思われる。

火野目山城はこうしたリアルな戦いの舞台、まさに「つわものどもの夢の跡」である。城館報告書の図面をたよりに夢の跡を辿る。だが、どうも現地に合わない。南北朝期の城であれば、報告書の図ぐらいなものだろう。最初そう思った。しかし現状はもっと生き生きしている。後世かなり手が加ったのだろう。自然石を巧みにいかした堅固な郭、大きな竪堀、深い堀切…おそらく戦国期の改修だろうが、この現状をこんな図にしておくのが残念で、悪い癖とは思いながら、半日かけて図面を修正した。

ここにいう山内観西については、「山内家文書」の系図では判然としない。平治の乱で戦死した俊通の子通時（経俊弟）が、世羅部津田郷の地頭職をたいきさつは不明であるが、おそらく承久の乱後の事と思われる。「山内家文書」によれば、この山内氏の系図は

「適時――是通――通茂――通藤――通宗――通継（建武三年＝一三三六、従尊氏戦死於四条河原）――通知（通継女と里見義俊の子）――男（若鶴丸、為通知養子実父不知）」となっている。

残存文書も少なくわずか十通あまりなので、詳しいことは判らない。一応その内訳を記しておくと、通藤後家尼「真如」と通宗後家尼「性忍」の相論裁定の関東下知状、通継到着状、軍忠状二通、通継譲状二通、通知譲状関係二通のみで、他に津田郷に関するものは、津田郷内和田村について広沢氏との相論に関するもの（延文頃のもの四通、兵庫允通氏＝通時男の名あり）である。

『群書類聚』系図部によると、経俊・通時世代から三～五代の世代に三十名近い男性名が、通称あるいは宮途名で記載されているが、法名はほとんどない。したがって「七郎観西」が誰か判らない。ただし「七郎」を称する者としては、通時の甥の子孫（四世代後）に「通益」を名乗る人物がいる。

これ以上詮索するのは邪道と思われるので筆を擱くことにする。

鎌倉初期に西国の僻地に派遣された一荘官としての地頭が、西遷土着して一四世紀には村々に「一分地頭」という形でがっちり根を張っていく、そういう胎動が南北朝の争乱であったことを物語る山城であった。

二枚の図を掲載するのでぜひ参考にしていただきたい。

（文責　出内博都）

# 秋の古墳めぐり
# 美作の国で「陶棺」を見た

小島　袈裟春

「陶棺」とは何だ。

焼物即ち陶製の棺桶のことである。陶製の棺といえば、弥生時代北九州を中心に盛行していた「甕棺墓」が、数千記の発掘例とともに有名であるが、ここでいう陶棺は、弥生墓とはかなり様相が異なる。

それを事前に行なわれた古墳部会長の山口哲晶先生の講義のレジュメから引用してみる。

一、作製時期

六世紀後半の古墳時代後期から終末記まで。

二、存在範囲

岡山県（美作・備前・備中）、畿内（大和・山城・河内・摂津・播磨）に偏在するが、他に東は常陸、西肥前まで小数ずつ点在し、現在約六百五十余例が知られている。特に岡山県は一県で全体の七十％以上の四百九十九例が出土しているが、その内の三百四十四例は美作（津山市周辺）に集中している。なお備後では、従来出土例はなかったが、近年にいたり山陽自動車道の工事中福山市のザブ遺跡から一例の出土があったと森浩一編著「古代史の窓」に報告されている。

三、その材質

材質は大きくは土師質と須恵質に分かれるが、判然としないものもある。須恵質のほうは固いが、数は土師質が圧倒的に多い。

四、形状・寸法

大きくは土師質、須恵質とも岡山型と畿内型に別れるが、ここでは全陶棺に共通する基本形を記す。

①寸法は大きいもので幅約七〇センチ、高さ約九〇センチ、長さ約二メートルで、以下種々ある。

②棺底に円筒形の脚が長軸方向に二ないしは三列で装着されている。

③大型のものは棺身、蓋ともほぼ中程で前後に分断されているが、この場合の合口は印籠合わせである。ただし一体作りのものもある。

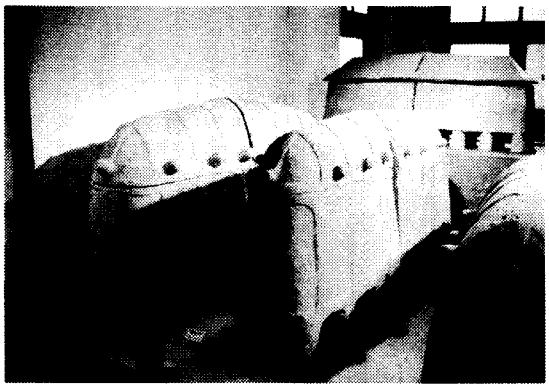
五、形状・文様

①土師質・畿内型

全体の形は寄せ棟で、棺身と蓋の高さはほぼ同じ。卵形の屋根は別作りで、棺身の合口に鍔がある。全体に美しい亀甲文様があり、器壁は薄め。蓋の左右に数カ所の穴がある。色はレンガ色。

②土師質・岡山型

形は畿内型に似ているが、蓋より棺身の方が高い。蓋の左右数カ所に縄掛け様の突起がある。



津山郷土博物館の一階に展示されている陶棺
手前の三基は土師質岡山型陶棺
後方は須恵質家形陶棺

棺身と蓋は一体作りで、成形した後、工具で切り離した痕跡である。また蓋の内部の成形のため、横側に腕の入る穴を空け、終了後に塞いだ形跡もある。

全体に亀甲文様があるが、大雑把でただの突帯文のようでもある。

器壁は厚く、色はレンガ色。

須恵質・畿内型、岡山型とも後半頃出現。高温度で焼成され、器質は固い。蓋は別作りで寄せ棟型が多い。初期には土師質・岡山型のものもある。色は薄い墨色。岡山県では備前に集中している。

さて、見学の始めは佐良山古墳群である。津山市の西南端近く、吉井川の支流の皿川の流域で、六世紀の中期以降の古墳約一八〇基が密集しているのだそうだ。見学できたのは剣戸塚古墳群と呼ばれる一四基の内、一番手近の東塚と西塚の二基だった。

山裾にこんもりと原形をよく保った二基の円墳が並び、中間に複数の供養の石塔があった。

二基とも横穴式無袖の石室が南東に開口している。石室の全長は九メートル以上、幅一・七メートル、高さ西塚二・四メートル、東塚一・六メートルである。西塚には陶棺の下部が見えるそうだが、残念ながら照明がないので確認はできなかった。

東塚は別名「比久尼塚」とも呼ばれ、江戸時代日蓮宗不受不施派の僧侶と四人の尼僧が改宗の弾圧に抗議してこの石室に籠もり、断食死したためこの名があるのだそうだ。

石室の奥に石仏が安置され、不受不施派の聖地として整備してある。塚の中間に立つ石塔にはこの五人の名が刻まれていて、その事蹟を今に伝えている。

ちなみに日蓮宗不受不施派は岡山県において、隠れた信仰を伝え、明治になって公認を訴え、明治九年（一八七六）になって公許を受け、岡山県御津町金川に建てたのが同派の本山蓮華教院妙覚寺なのである（昭和六二年［一九八六］備陽史探訪の会一泊旅行の資料より抜粋）。

本題に戻る。次に見学したのは同古墳群の盟主的存在である中宮古墳である。造り出し付円墳で、片袖式の横穴式石室に三体が葬られ、馬具や四重の土師器壺、須恵器など多数の副葬品が出土したそうだ。

なお、この古墳は初期のためか陶棺はなかったが、佐良山古墳群全体は陶棺の密集地域なのだそうだ。

岡山大学の近藤義郎先生の調査によると、墳丘規模一五㍍以下の古墳が八〇％を占め、九〇％以上が横穴式石室で、陶棺を内蔵するものが多く、一室に数個内蔵するものもあるとのことである。先に見た剣戸塚も石室規模からすると、複数の内蔵は充分可能のようであった。

次の見学は古式の前方後円墳、日上天王山古墳とその峰続きの日上畝山群集墳であった。天王山古墳と畝山北端の古式方墳との間に五六基が群集する円墳群である。方墳は四世紀後半、円墳は五世紀末から六世紀初めの築造で、石室は竪穴式であることが平成七年からの発掘調査で判明している。

この群集墳は、広島県三次市の風土記の丘の常楽寺古墳群と同時期との見方があると、当日の講師網本先生の説明があり、先生は、さらに続けて大略次の見解を示された。

「その時代、古墳を造ることのできる人は相当の地域を支配する首長、実力者、身分の高い者に許された特権であり、墳墓は権威の象徴であった。それがこの時期小さな墳丘をもつ古墳が急速に発生した背景は、当時の文献でも窺えるように（倭の五王の時代）軍事的な緊張の続く中で、実力を伸ばした武人達の長が特別に与えられた権利であろう」と。

これは納得のいく見解であった。

軍事的緊張は六世紀にも高まる。五二八年筑紫の君磐井と倭の将軍物部麁鹿火との決戦、五八七年物部氏と蘇我氏の決戦と武人は勢力を増す。

前出の佐良山の群集墳はまさにこの時代に始まるのだそうだ。

そして陶棺の使用も始まる。

近藤義郎先生は倭の朝廷に「鉄」を献上したことによって陶棺を許可されたのであろう、との見解を示されたのだそうだ。

また、倉敷考古館の間壁忠彦・葭子御夫妻は著書『吉備古代史の未知を解く』の中で朝廷の直属軍団として尽くした忠節の賞として陶棺を許可されたのでは、と記されている。

さて、その陶棺と津山城の南側の「津山郷土博物館」一階に展示されてあった。

土師質の岡山型が五基。須恵器で無紋の家形陶棺一基が展示してあるが、その陶棺と向き合って、さあ、何といったらよいのであろうか…。実は私は陶棺を見学したのは今度が初めてではない。もう十年以上も前から倉敷考古館を訪れるたびに眺めていたのである。

しかし、今回は様相が異なる。そのよってきたる所以の、事前学習を受けた上、現地を見学して肌で事実を認識したのである。ただ眺めてはいられない。

棺身と蓋を切り離した後を指で撫でてみて、制作者の苦心がまざまざと伝わってきた。何度か失敗を重ねた上でこの方法に辿り着いたのであろう。倭の朝廷は陶棺は許可しても、作製のノウハウは教えなかったのであろうか。それとも吉備は独自の形態にこだわったのであろうか。

図表上の畿内型と岡山型を見比べながら、しばし私は考え込んでいたのであった。

古墳講座Ⅵ

## 鬼ノ城見学会

新年一月の古墳講座Ⅵは、古墳とは少し離れて「鬼ノ城見学会」を実施します。十月の郷土史講座で七森さんに鬼ノ城についてお話し頂きましたが、これに参加された方は行ってみたいと思われた方も多いと思います。そこで今回の企画が生まれたのです。

最近の発掘調査で新発見が相次いでいる鬼ノ城、ぜひご参加下さい。

### 【実施要項】

**《日程》**一月九日（土）
**《集合時刻》**午後一時三〇分
**《集合場所》**福山駅北口「福山キャッスルホテル前」
**《募集数》**限定一二名（先着順）
**《参加費》**実費（一五〇〇円程度）
★会員のクルマに分乗。クルマを出してくださった会員は無料。ガソリン代・高速代を分乗した他の三人で分担。
**《その他》**歩きやすい服と靴でご参加ください。
**《受付》**山口古墳部会長宅まで。（☎〇八四九―四五―六一七三）
**《受付期間》**一二月二一日（月）～二二日（火）午後八時～九時（時間厳守）

# 燃える秋　但馬・丹後を味わう旅

中島政子

台風十号接近中の予報の最中、十月十七日六時四十五分福山駅北口に集合、激しい雨の中バスに乗った。役員の方々は前夜一泊旅行を決行するか否かの相談されたほどの悪天候だった。役員の皆様のご苦労に感謝しながらも、自分は晴れ女だと思っているので、良い天気になることを信じることにした。

バスが山陽自動車道に入ると、田口会長が挨拶。その後、初日のコースの説明やメインの竹田城の話が始まって、平田さん、寺崎さんの豊かな知識と情熱がひしひしと伝わってくる。

竹田城は室町時代、山名宗全が但馬支配の一環として築いたという。以来、慶長五年（一六〇〇）の廃城まで、幾多の攻防が繰り返されただろうこの城の歴史の重さや、初代城主大田垣氏のことなど、私は身を乗り出して聞いた。

豊臣秀吉は全国統一を達成した後、朝鮮侵略を決行し、但馬の各大名にも出兵を命じた。すなわち出石城主前野長康、豊岡城主明石則実、八木城主別所重棟、そして竹田城最後の城主となった赤松政秀である。政秀は秀吉恩顧の大名として関ヶ原の戦いでは西軍につくが、結局、鳥取で自刃し、竹田城は廃城になるのだ。

雨は小降りながらなおも降り続いている。竜野西SAでトイレ休憩をとったとき、竹田城に登るか、それとも姫路で博物館めぐりするかどうかの決を採った。結果は圧倒的多数で竹田城に登ることになった。やはりみんな竹田城を楽しみにしているのだ。

バスは山陽姫路東ICから播但自動車道へ入り、播磨と但馬の境、真弓峠を目指す。古来、この峠をめぐって赤松氏と山名氏の戦いが幾度となく繰り広げられたという。中でも文明十五年（一四八〇）十二月二十五日、深雪の真弓峠で赤松政則が山名政豊方の先鋒垣屋越前守の二千騎の急襲を受けて大敗した戦いは有名だ、と資料にある。

**赤のまま兵ものどもの夢のあと**

バスは播但自動車道を下りて一般国道へ。しぶくバスの左窓に目をやりながら心は竹田城へ。二〇分ほどで竹田城の直下のドライブイン着。その時、奇跡が起こった。予報が外れて雨があがったのだ。そして、竹田城見学の二時間あまり、まったく雨が降らなかったのである。

**▼竹田城（和田山町竹田）**

**雨あとの山河の晴や秋日和**

旅行委員のはからいで大型タクシーのピストン輸送によって頂上まで辿り着いた。朝霧の漂う竹田城は雲海の上にあった。まるで天上世界にいるような気分。全員、お天道様に感謝、感謝。

**城あとへ水音まどふ秋の蝶**

竹田城の石垣はとても良好な姿で残っている。山頂に全員がそろうまで、山城に詳しい坂本さんに石垣のことを教えてもらった。それによると、ここの石垣は穴太積みという伝統的な方法で積まれているそうだ。

本丸を中央にして南北方向に規模の大きい曲輪が並んでいる。

二の丸・三の丸・奥殿・講武所・南千畳・北千畳・花屋敷・正門・大手門・武の門のほか、要所要所に櫓を持ち、規模・構造ともによく保存整備されている。中でも花屋敷曲輪は、全国でも例の少ない石狭間（鉄砲用）が設けられている。

**搦手門ここにありしあたりに蔦の遺ふ**

竹田城を下りた後、昼食をすませて和田山町郷土館を訪ねた。その後、大藪古墳群の見学の予定だったが、足下が悪いので省略し、そのまま出石の城下町に行くことになった。

**▼出石城下町町並散策**

出石城は江戸時代になって小出吉英が有子山にあった山名氏の城を山麓に移築した平山城である。それから百年後、仙石政明が出石藩の居城とした。

大きな欅材が贅沢に使われた登城橋を渡り、門をくぐって二の丸跡から本丸跡へ向かった。本丸跡に立つと、北に向かって大きく視界が開け、眼下には出石の城下の家々がまるで箱庭のように整然とその閑雅な甍を並べていた。

城下町出石のシンボル辰鼓櫓が小さな掘りに囲まれた石垣の上に建っている。藩士たちの登城時刻の辰の刻（午前八時）になると、この櫓の上で太鼓が鳴らされていたらしい。今は大時計に変わっているが、往時を偲ぶことが出来た。

家老屋敷は、江戸時代の三大お家騒動の一つに数えられる仙石騒動の中心人物、仙石左京の屋敷を復元したもので、大名行列に使った道具などが展示されている。奴が持つ槍は鳥獣の毛で飾られている。中でも、大白鳥の毛や小白鳥、黒鳥、また白熊の毛のものなどが豪華に思った。また、二階には隠し部屋があり、興味深かった。

出石は山名氏以来の伝統と格式の

ある古い町である。鬼門を守るために山名氏はその菩提寺宗鏡寺を建立した。現在ある寺は元和二年（一六一六）に沢庵和尚が再建したもので、和尚自作の見事な庭園や、伝説をもつ夢見の鐘などがある。

宗鏡寺を下ったあたりには魚屋町、鋳物師町、宵田町などがあり、旧城下町の往時が偲べる。新撰組の討手を逃れて出石に潜んだという桂小五郎の潜居跡などもあって興味はつきない。

出石菓子とか奴饅頭などが、並んでいたが、土産に丹波杜氏、但馬杜氏おひざもとというブランドの「楽々鶴」を買った。

**▼出石神社（出石町宮内）**

出石神社は但馬一宮である。但馬開発の神、天日槍神が祀ってある。伝説によると、神代の天日槍が、一面泥の海だった大地を切り開いて、水を日本海へ流して豊岡や出石の盆地ができたという。

いよいよ「かんぽの宿　但馬海岸豊岡」に到着。宴会は平田さん、佐藤秀子さんによって盛り上がった。土井さんをはじめ大カラオケ大会となった。奇術をする人、飲む人、会長を囲んで話す人、この上なしの大宴会だった。外は風雨音の交じる波の音が聞こえた。早朝、台風は日本海に抜けたらしい。

**新松子海は真横にまぶしくて**

**▼如意寺（京都府久美浜町）**

行基によって開山されたという。本尊の十一面観音像も行基作という。阿弥陀如来座像は中品上生（弥陀定印）で、中指と親指が触れて組まれていた。眼病によく効くという「閼伽井の水」を頂いてバスに乗る。

**天平の観音おはす紅葉晴**

**門前に久美浜見ゆる雁渡し**

**▼神谷太刀宮（久美浜町）**

驟雨のためにバスの中から見ただけだったが、垂仁天皇の時代の四道将軍の一人丹波道主命によって創建されたという。ご神霊は丹波道主命が奉納したという国見剣である。なお、境内には兵庫県最古の明治の木造建築物である、旧久美浜県庁御玄関棟が移築されている。

**▼丹後国分寺跡（宮津市国分）**

丹後国分寺の礎石はしっかりと残っていた。今から約千三百年前の奈良時代は大陸文化を積極的に取り入れ、仏教文化が全国に波及した時代である。聖武天皇は天平一三年（七四一）二月、国分寺建立の詔を発し、国ごとに本格的な伽藍をもつ寺院を建立して、疫病の流行や飢饉そして貴族間の争いなどの社会的混乱を鎮めようとした。現在残る礎石群はかつての金堂・五重塔・中門を偲ぶほかはない。

同じ敷地内にある京都府立丹後郷土資料館を見学後バスに乗った。

**▼籠神社（宮津市大垣）**

次は天の橋立の対岸にある籠神社である。「籠」を「この」と読むことを今回初めて知った。天照大御神が五十鈴川の辺に鎮座される以前にこの地にいらしたことがあることから別名「元伊勢」ともいう。海部氏の祖神の天照国照彦火明神、天照大御神・豊受大神・海神・天水分神などを祀る丹後一宮である。

国重文の石造狛犬は鎌倉末期の作で、前足には岩見重太郎に切りつけられたという傷があったが、立派な狛犬だった。

**▼智恩寺文殊堂（宮津市文殊）**

次々とあとを絶たない参詣者に交じって、ボケないように頭脳向上を厚かましくお願いした。

本堂の文殊堂は宝形造、銅板葺きの屋根が美しい。正面に掲げられた隠元禅師筆の「五臺山」の大額が見事だった。本尊の木造文殊菩薩は獅子に乗って海を渡る姿をしている。智恵の文珠堂こと、山形県亀岡の文珠院、奈良県安倍文珠院とともに日本三文珠の一つである。本尊の脇士善財童子・優閦王像の三体、金鼓門を入って左手の多宝塔などが国の重文である。

ここには七姫伝説もある。聖徳太子の母である間人皇后をはじめ、小野小町・静御前・細川ガラシャ・安寿姫・乙姫・羽衣天女など美女たちの由緒地である。また、和泉式部は何年かを丹後で過ごしている。歌塚・宝篋印塔がある。慶長一六年（一六一一）に京極高知が砲術家稲富一夢斎のために建てたという宝篋印塔もある。

**▼天の橋立（宮津市文殊）**

天の橋立を見に行こうと思ったらちょうど廻旋橋が突然ギギギと回り始めて陸地と平行になって止まった。大量の土を積んだ運搬船が文珠水道をゆっくりゆっくり通っていった。廻旋橋を渡ると「小天橋」と呼ばれる小さな砂嘴があり、その先の長くて美しい松並木を「はし立や　松は月日の　こぼれ種」与謝蕪村の句碑にあった句を口ずさみつつ散策した。

**▼加悦町古墳公園（加悦町明石）**

まず「はにわ資料館」に入り、古墳造りをテーマにした映像を見せていただいた。その後、加悦町の古墳時代に作られた埴輪など実物資料の展示を見て、古墳公園に登った。公園は、国史跡の蛭子山古墳と作山古墳など一六〇〇年前の状態に復元整

備され、なだらかな大江山連峰を背景に古代の思いを十二分に偲んだ。全員で作山古墳の丘を背景に記念撮影をした。

帰りのバスの中は佐藤秀子さんの誘導で民謡とか替え歌などが飛び出し、とても盛り上がった。最後は副会長の中村さんがユニークな挨拶で結ばれ、有意義な旅行が終わった。

## 短歌二首

藤代由子

♣古墳をめぐりて

幾年か永遠のねむりを
今はなく
歴史となりて人は集うも

♣遺跡を訪ねて

安らぎの土地を求めて立去りし
遺跡となりて今の世に生き

## 新入会員紹介

一泊旅行の際に入会されました。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

## たまには一年を振り返ろう

平田恵彦

城郭研究部会（「備後古城記」を読む）の中心メンバーは、この一年、夏場の一時期を除いてほとんど毎週どこかの山城に登っておられたという。出内部会長によれば、その数五十を下らないということだ。僕はこの九月で入会して六年になったが、それでもこの間登った山城は百余り（決して少ない数ではありませんよ）で、一年で五十というのはとんでもない数である。来年もこのペースで続けられるのだろうか。

古墳部会は、休みの月もあったが、原則として毎月一度の古墳講座Ⅴで現地学習を続けた。十一月初旬には「発掘された日本列島98」を見学に倉吉から淀江町・大山町方面に行ったのだが、そのとき神原正昭さんは「わしゃー、皆勤賞じゃ」と誇らしげに話しておられた。皆勤賞の方は他にもきっとおられるだろう。僕の出席率は八割ほどだ。

古墳部会では今年中に掛迫六号古墳の測量調査報告書を出す予定にしていたが、年内に間に合うかギリギリのところ。出版が延びに延びた原因の一つが僕の原稿の遅れにあるので、これにはただただ小さくなるしかなく、最悪でも一月には出さなくては会員の皆さんに顔向けできない。

あっ、それから遅刻はやめましょうネ、遅刻は（一部の人は分かる）。

歴民研では、昨年から継続していた加茂町の石造物分布調査の第一段階が終わった。つまり加茂谷の、上加茂を中心とした地域の調査がほぼ終了し、あとはカードを整理して調査結果をまとめる作業だけなのだが、実はこれが大変で何時までにできるか見通しが立っていない。

「古事記を読む」はだいたい二十人前後の参加者で落ち着いている。学習は遅々として進まず、一時は永久に終わらないのではと思ったりもしたが、ようやくあと二年！ほどで上巻が終わるところまでこぎつけた。

事務局長の立場からいうと、相変わらず忙しい一年だった。会の行事のすべてに関わっているので、とにかく雑務が多く、時間がとられる。毎日会務に追われ、いつも何かの原稿をワープロで打っているような気がする。好きな読書ができず、イライラも募った。しかし、例会などの行事が成功し、参加された会員から「よかったよ」「いつもご苦労様」などと声をかけられると、いっぺんに疲れが吹き飛んで、またやる気が出てくるから不思議なものである。というよりも、正直これがなかったら事務局の仕事など馬鹿馬鹿しくてやっていられない。

僕個人にとっては「旅づくし」の一年だったように思う。個人的な旅行、会の親しい仲間とのグループ旅行、会の諸行事の下見等、日帰り・宿泊を問わず、とにかくやたらクルマを走らせ、出歩いていた。

グループ旅行では、大阪・奈良方面に行くことが多かった。一月に天理市の黒塚古墳で大量の三角縁神獣鏡が発見され、その説明会に駆けつけたのが一月十五日。この時は日帰りで、田口会長、坂井さん、錦ちゃんと一緒だった。小雨の降り続く中、黒塚古墳以外にも、和爾下神社古墳・西山古墳・艸墓古墳・文殊院西および東古墳・岩屋古墳・真弓鑵子塚古墳・牽牛子塚古墳などを見学した。

これがきっかけとなり、以後連続してこの方面に出かけることになった。一つには「古事記を読む」の参加メンバーに、数年前から飛鳥に連れて行ってくれといわれていながら約束を果たしていなかったということがある。いま改めて数えてみると、個人的な旅行も含めれば、畿内だけで十回、延べ二十日も出かけている。

そのひとつひとつに思い出がある

が、春の彼岸の家族旅行はとくに印象に残っている。この旅だけは家族水入らずの旅で、主な目的は墓参りだった。史跡めぐりの多くは親しい会員仲間との旅行で、家の者とはほとんど出かけてない。というより、僕自身が避けている。僕が行くような場所と家族が好む場所とではあまりにも違いがありすぎるからだ。

平田家の墓は橿原市曽我町の光岩院という寺にある。曽我町はJR桜井線と国道二四号線バイパスの交差するあたりで、この地はいうまでもなく蘇我氏の本貫である。しかし、史跡めぐりでこの周辺を何度も通っているにもかかわらず、法事は家族任せで、僕は今まで一度しか墓参りをしたことがなかった。それも高校生のころである。そうした僕を家族は詰るようにいう。確かに福山から遠く離れた地であるとはいえ、この六年で奈良には四十回以上行っているので、不心得であるには違いない。

そうしたわけでこのたびは神妙な気持ちで墓参りをした。僕を溺愛してくれた祖父母もこの墓の下に眠っている。墓の掃除をし、水をかけ、香華を供え、掌を合わせるとやはり感慨深いものがあった。

それから橿原考古学研究所付属博物館を見学し、大淀町のいとこの家で一休みした。そうこうするうちに姉が迎えに来て、四人で吉野郡川上村白屋に向かった。ここが父方の里で、僕が生まれた場所でもある。

白屋は吉野川上流の右岸にあり、急斜面の中腹にへばり着いた集落である。もっとも近辺の部落はこれが常態である。義兄（川上村役場で教育次長をしている）によると、川面に近い場所だと大水が出たら一気に水没する恐れがあり（約二〇km上流に日本最多雨量を誇る大台ヶ原がある）、山頂に近い所だと仕事（主に林業）や物資の流通に不便なので中腹に営まれているということだ。

白屋には二階建ての家がない。間取りを増やすには平屋を立て増す。僕の生家には斜面の上下段に二つの家があって、僕は「上の家」で生まれた。連絡をせず突然訪れたので叔父はとても驚いていたが、快く迎えてくれた。僕は四年ぶりである。叔父や叔母と昔話などしているうちに皆で墓に参ることになった。墓は少し離れた場所にある。

父の実家は神道で、人は死ねば神になる。墓ももちろん神道墓である。したがって戒名はなく、男の墓碑銘は姓名の後に「大人命」、女は「刀自命」が着くだけでいたってシンプルだ。神式では、墓に参る場合に榊を供え、米・小豆・塩等を散らすが、線香は焚かない。しかし、墓石の形状は仏式と大差がない。

その夜は川上村迫の「杉の湯ホテル」に泊まった。役場の隣りにある村営のホテルだが、設備は充実して一流ホテルにひけをとらないし、ロケーションも最高である。ことに総桧造りの浴槽は素晴らしい。朝食時に東京から川上村に講演に来ていた評論家と一緒になったが、彼女も激賞していた。宿泊料金は義兄が払ってくれたのでいくらか分からなかったが、「かんぽの宿」と同じくらいだと思う。最近は、花見の季節でも吉野山の旅館やホテルに泊まらずに多少離れていても「杉の湯」に宿泊する客が増えているそうだ。

二日目は母と叔母のために飛鳥周辺の観光ルートをまわった。石舞台古墳や国立飛鳥公園館、高松塚古墳・壁画館などの無難なところである。唯一、僕の意思を通したのが高取城（高市郡高取町）だ。この山城はもともと越智邦澄が鎌倉末期に築城したものだが、現在の遺構の多くは織豊期に豊臣秀長の命で本多正俊が築いたとされている。近世に入って本多氏が断絶した後は植村氏が入部するが、その身代二万五千石にはまったく似つかわしくない規模である。秀長の時代におそらく天下普請に近い形で基礎が造られていたはずだ。

壺坂寺への道をクルマで進み、寺を通り過ぎて登り切ると、登山道にぶつかり、ここからは徒歩である。母は足に自信がないというので、叔母と二人だけで登ったが、本当にとてつもない山城である。叔母のようなまったくの素人でもその凄まじさは分かるらしく「すごい、すごい」を連発していた。道に沿って次から次へと郭が現われ、城門を入ってからもそれは続く。標高五八四mの山頂には石垣が累々と連なり、ただただ圧倒される。

後日、錦ちゃんたちともう一度訪れた。そのとき出内先生が「建物こそ残ってないが、まるで姫路城が山の上にあるようだ」といわれたのが印象的だった。ただ、本丸からの展望が今一歩なのが唯一の欠点である。壺坂寺方面からクルマを利用すれば、徒歩二〇分程度、城下町のあった土佐の集落から徒歩で登ると一時間半はかかるだろう。

この旅行の後も仲間と一緒に、熱病にかかったように旅に出た。その多くは既に行った場所だったけれど、それなりにためになったと思う。

しかし、来年は自分のためだけの旅を増やそうと思っている。

# 太平記の里を訪ねて

三好勝芳

磐座亭主人の案内で八月十日から二泊三日の阪奈史跡めぐりに出発。第一日目は泉州堺を中心に史跡めぐりをし、「かんぽの宿　富田林」に宿泊した。その概要は本誌八五号に報告したとおりだが、今回はその続編である。かんぽの宿が河内金剛山系の嶽山の頂上近くにあり、周辺が太平記の里として古くから知られ、伝統の風情に彩られたところであるところから、二日目は大楠公に関連する史跡を探訪した。

楠木正成は戦前の教科書では、南朝一の忠臣と謳われ、忠君愛国の鑑として喧伝された。その天才的ともいえる奇略奇策を用いての戦いぶりは世に知られ、何倍何十倍もの敵を相手に一歩も引けをとらなかった。それは正成の生い立ち、自然や暮らしぶりなど、河内の特殊性が土台にあって大きな力になっているといわれている。楠木正成の父は正遠といい、河内の一土豪であった。林業を主な生業にした田畠の少ない生活で、決して豊かではなかったという。

一方、正成は商人や運送業者らと結びつき、最新の情報や進んだ知識を得ていたという。一所懸命に土地にしがみつく伝統的な武士ではなく、「悪党」と呼ばれる時代反抗的な武士団の頭目だった。正成の兵は野伏、僧侶、商人、盗人から乞食までいたそうで、従来の常識を破った戦術もそんなところに起因している。正成は河内源氏の子孫ではあるが、同じ源氏の頼朝が興した幕府を倒す尖兵となり、後醍醐天皇の建武の中興の立役者となるのである。

二日目の朝は六時前に起床、洗面後すぐに外に出た。宿の西南に楠木正成が築城した嶽山城（城主は弟の正季、別名竜泉寺城・東条城）があるので起き抜けの散歩である。みかん畑の道を通り抜け、山頂に登ってはみたものの、ブルドーザーが入り込み、何かの土地造成をした後で、城郭の遺構を窺い知ることはまったく出来ず悔しい思いをした。しかし、朝食まではまだ時間があるのでそれまで近隣の史跡を訪ねることにした。

クルマに乗って山を下り、最初に訪れたのが千早赤阪村である。金剛山の西麓に広がるこの村は、いうまでもなく楠木正成の生地である。

佐備川に沿った丘陵を越えて森屋の集落に入ると、南方に下赤阪城のあった丘が見える。後醍醐天皇に呼応して正成が挙兵した城として有名だが、いまは赤阪中学校の校地となり、遺構はほとんど残っていないらしい。町役場の東には道の駅と近接して千早赤阪村郷土資料館がある。その広場の一郭に「楠公誕生地」と記した大きな石碑が立っている。

楠木兵衛尉正成は永仁二年（一二九四）、この地に誕生したと伝えられている。文禄年間に増田長盛が秀吉の命を受け土壇を築き、建武以後、楠木邸にあった百日紅を移植したという記録が残っているという。また、元禄年間には藩主石川総茂が保護を加え、その後、明治八年（一八七五）大久保利通が楠公遺跡めぐりの際、ここに石碑を建立し、顕彰したのである。資料館には楠公ゆかりの品々が展示されているのだが、早朝なので見学はできない。

楠公生誕地から東南に走ると、広域農道にぶつかる。ここを右折して南下すると、道の左手に上赤阪城跡の登山口があり、「此の山頂赤阪城跡」の標柱が立っている。この城は楠木方の平野将監が守っていたが、阿蘇治時らに攻められて落城した。山頂に本丸・二の丸・出丸等の遺構が残っているらしいが、時間の関係で登ることはできなかった。

広域農道を元に戻って国道三〇九号線にぶつかり左折、しばらく進むと建水分神社（千早赤阪村水分）に着く。案内板によれば、崇神天皇五年に「天下餓疫の際勅して創立され」たとのこと。「水分」とは「水配り」のことである。池や溝を設けて農業を振興した金剛・葛城山西麓の水の神を祀ったものらしい。代々この地に居住した楠木氏は、祭神の水分神を氏神として奉祀。その崇敬篤く、後醍醐天皇の勅命をいただき、元は水越川のほとりの下宮にあった社殿を正成が現地に再建したという。本殿は、春日造の中殿（天御中主神）と、流造の左殿（天水分神）・右殿（国水分神）からなり、国の重要文化財に指定されている。

建水分神社から少し戻り、府道二七号線に沿って北上すると、間もなく河南町芹生谷に入る。神社からは一キロちょっとで道の左手に復元された美しい古墳が見える。これが有名な金山古墳（国史跡）で、大小二つの円墳を連ねた瓢簞形の双円墳である。この墳形は朝鮮半島ではよく見られるが、日本では非常に珍しい。北側の横穴式石室には家型石棺二基があり、銀製耳環、瑠璃玉、馬具、鉄刀などが出土している。

金山古墳から宿に帰り、朝食にありつく。お腹のよくこなれた後のこと、バイキング方式の朝食はまこと

に好都合で、美味しく満腹できた。

朝食後直ちに出発。かんぽの宿のある嶽山の北麓、正成・正季兄弟の砦、嶽山城の北側の谷間にある滝谷不動（明王寺、富田林市滝谷）に向かう。この寺は弘仁二年（八一一）、弘法大師の創建と伝え、本尊の不動明王は嶽山城の守護仏といわれている。南北朝の兵火で焼失後、一人の盲目の僧によって再建され、それ以後、眼病治癒に霊験あらたかな不動尊として知られるようになった。現在では真言宗智積院派に属し、成田・根来の両不動尊とともに日本三不動尊の一として、毎月二十八日の縁日は大変賑わっているという。

滝谷不動から府道二〇一号線を南下して楠批庵観音寺（富田林市甘南備）に参る。この寺は正平三年（貞和四年・一三四八）正月、四条畷の戦いで楠木正行・正時兄弟が討ち死した後、正成夫人久子が出家してこの地に草庵を営んだことに始まる。一族の菩提を弔っていた久子は、正平一九年（康安三年・一三四八）七月に六十一歳で入寂。その後、三男正儀が亡母のために観音堂を建てて墓所を造営したが、足利方に攻められて堂は焼失、楠木党も四散した。

以後長い年月を経て大正二年（一九一三）、荒廃した寺院跡の復旧を行ない、同四年には夫人の墓所を、同六年に旧草庵と観音堂を再建し、同十一年に本堂を建立した。さらに昭和七年（一九三二）には思光閣が落成し、本尊を十一面観音とした現在の伽藍が完成したのである。ひっそりとした境内は深い緑に覆われている。あまり訪れる人もないらしく、ただ蝉の声だけが響いている。庫裏で朱印帳を書いてくれた若い娘さんの優雅な面影が印象的であった。

楠批庵の前の山を南に越え、国道三一〇号線に出て五条市方面に左折すると、すぐに檜尾山観心寺（河内長野市寺元）がある。

観心寺は奈良時代に役小角が開き、弘法大師の弟子実恵が天長四年（八二七）に創建した寺で、楠木正成幼年時代の学問所でもあり、南朝ゆかりの寺としてよく知られている。広い境内には国宝の金堂のほか、有名な楠公の建掛塔（重文）、楠公首塚などがある。また、境内右の最も奥まったところにある階段を登ると、後村上天皇の檜尾陵がある。

寺宝としては、観音像としておそらく日本一有名な国宝の秘仏、如意輪観音座像（立膝）があり、重文の仏像・画像多数、また、南朝関連文書（『楠木家文書』）も所蔵している。如意輪観音座像は毎年四月一七日、一八日の両日しか開帳されないので拝観できなかったが、磐座亭主人によれば、我々の会の熊谷操子さんがこの拝観日に合わせてわざわざ参拝されたほど素晴らしい観音様であるらしい。写真で拝すると、確かに可愛いお顔が誰にでも好感をもたれるようである。

真夏の太陽の下で広い境内の坂を上り下りしたので、観心寺の門前の食堂にかかる「氷」の旗が目に入ると一目散に駆け込んだ。冷たいかき氷の美味しさが身に染みた。

観心寺から国道三一〇号線を西行、そのまま直進して国道から離れ、新興住宅地の清見台に入る。南海高野線三日市町駅を越えて国道三七一号線にぶつかり右折。しばらく進むと国道一七〇号線のバイパスに出る。ここを左折し、五キロほど南西に進んでトンネルを抜けると旧道に戻る道があり、これを行くと突き当たりが天野山金剛寺（河内長野市天野町）である。周辺は杉の古木が生い茂り、森厳な雰囲気である。

金剛寺は奈良時代行基が開創し、弘法大師が密教を修業した地と伝えられ、その後、八条女院（後白河上皇の妹）の保護を得て「女人高野」として栄えた。また、南朝の後村上天皇の「天野行宮」としても著名である。この天野行宮には一時期、北朝の三上皇（光厳・光明・崇光）が幽閉されていた。

正門である巨大な楼門を抜けると、すぐ右手に食堂があり、階段を昇ると、右手に鐘楼と金堂がある。本尊は木造大日如来座像で、脇侍として木造隆三世明王座像・木造不動明王座像が控える。左手には多宝塔が聳えている。さらに階段を登ると、観月亭・御影堂があって、最奥が光厳

観心寺山門
百日紅が色鮮やかに咲いていた。

天皇の分骨所である（これらの仏像および建築物はすべて重文）。

北門を抜けると、摩尼院（重文）があり、ここに後村上天皇の行在所があった。その東側の建物が観蔵院（三上皇の幽閉所）で拝観可能。この室町時代に造られた庭園は一見に値する。宝物庫もともに見学でき、国宝の『延喜式神名帳』（現存最古の写本）や剣・附黒漆宝剣拵（両鎬無反り、平安時代の作）があり、楠木正成自筆書状（重文、達筆！）なども見ることが出来る。

他の寺宝にも多くの重要文化財がある。観音菩薩立像や尊勝曼陀羅図、日月山水図（六曲一双）、白銅鏡等の鏡類、手箱・経箱などのほか香炉・体箱などの法具もそうである。また、黒韋威肩白腹巻や黄薫韋威膝鎧（いずれも重文）など多くの南朝方の遺品も見逃せないものである。このように金剛寺は南北朝の歴史と密接な関係があり、国の史跡・名勝にも指定されているのである。自然豊かな中に堂塔が美しく配され、その落ち着いたたたずまいが訪れる者を厳粛な気持ちにさせてくれる実に素晴らしい寺である。

金剛寺で河内の太平記の里めぐりは終了し、昨日に続いて再度、和泉の史跡を訪ねることになる。堺市へ向けて国道一七〇号線（旧道）を西行し、途中ファミリーレストランで昼食をとる。その後、府道六一号線を北上し、鎌倉時代初期に築造された国宝の拝殿をもつ桜井神社（堺市片蔵）に立ち寄ってから堺市の中心部へ向かった。

堺市街に入ってからは石津ヶ丘古墳（履中天皇陵に治定）の北側を通り抜け、大仙公園内の堺市博物館へ。見学終了後、隣接する大山古墳（仁徳天皇陵に治定）の拝所で記念撮影をすませる。あとは本日の宿舎の橿原市の千輪荘へ向かうだけなのだが、せっかくなので道中少し寄り道をした。行基の生家跡に建てられた家原寺（堺市家原寺町、前号は記憶違いで、二日目だった）、先ごろ新聞報道された日本のピラミッド大野寺の土塔（国史跡、堺市土塔町）、阪和自動車道沿いにある黒姫山古墳（国史跡、美原町黒山）である。

陽は西に大きく傾き始めている。一路奈良を目指して大阪平野を横断、阪和自動車道から西名阪自動車道をひた走る。宿舎に着いたのは暮色の濃い七時過ぎであった。

今日もまた早朝から疲れも見せず、クルマを運転しながら案内してくださった磐座亭主人に心からの感謝の意を表わしたい。

# 吉野民俗学で謎を解く

門田幸男

## 逆さの剣の謎を解く

島根県に斐川町というところがあります。大量の銅剣が（銅矛・銅鐸も）出土した神庭荒神谷遺跡のある町で、備陽史探訪の会では知らない方はいらっしゃらないでしょう。

斐川町ではこの銅剣を「なぜ埋めたのか」「誰が埋めたのか」等の論文を募集し、謎の解明に努めておられます。第一回の公募には二三七通の応募があったそうですが、万人を納得させる意見はあったのでしょうか（入選論文集が出ています）。

しかし、素人の推理には限界があるのかも知れません。最近は方針を変えられたのか、学者を招いての講演会が開かれており、今年の招聘者は吉野裕子先生が含まれていました。ぜひ行きたかったのですが、私は病床で呻吟していましたので出席すべくもありません。先日、中国新聞にこの講演の概略が載っておりましたのでご存じの方もあるかと思います。実は、これから書くことは吉野先生のこの講演を下敷きにしています。

十月末日の「古事記を読む」の講座は「国譲り」の段に入っていて、建御雷神が波の穂に剣を逆さに立て、その上に胡座をかいて大国主神に、葦原中国を譲れ、と迫る話が出てきました。こうした場合、荒唐無稽な話と軽く読み過ごさずに、剣を逆さに立てることが何を意味しているのかを考えてみることが大切です。

ちょうどおあつらえむきに、会報八四号で紹介した吉野裕子先生の新著『陰陽五行と日本の天皇』の中にその意味を解き明かした一節があるので多少補足しながらご紹介します。

『石上神宮旧記』には

「石上布留（註①）御魂横刀の峰は、天に向い、地に植つ。所謂（註②）、十握剣は倒に地に植つ、とは是なり。高庭（註③）の地、相を栽えて神木と為す。剣の倒植の象に似ればなり。所謂、石上振（註①）の神杉とは是なり」

とあります。簡単にいうと、石上神宮では、剣を斎る時は逆さまに立てる決まりだが、これは杉の形と同じだ、というのです。少し説明をつけ加えると、剣と杉の表わす三角形は、実は燃え上がる火を表わしています。神の宿る山を「カンナビ」といい、その音を表わす漢字は「神名備」「甘南備」「神南備」等、色々当てられていますが、三角形の単純な形の山が多いので「神乃火」だろ

うと吉野先生は推理しておられます。しかし、仮に三角形が火を意味するのだとしても、なぜ逆さに剣を立てると建御雷神が大国主神に勝つことができるのでしょうか。

出雲から見れば、建御雷神の出身地常陸ひいては大和も東に位置しています。陰陽五行思想では、東は甲乙の木気で、出雲は常陸から見て真西にあたり、庚辛の金気です。ですから「金剋木」の理（金属刃物で草や木は切り殺される理屈）により、東の建御雷神は西の大国主神に呪術的には負けてしまうのです。

そこで考えたのが逆さまに剣を立てることなのです。金気の剣でも逆さに立てることで三角形となり、呪術的には「火」となって「火剋金」の理（堅い金属刃物も火熱によって溶けて威力を失う）によって、金気の呪力を失わせることができるのです。要するに、建御雷神は火の呪力を使用することにより西方金気の大国主神に勝つことができたのです。

銅剣の話に戻しましょう。西方出雲の象徴は金気の銅剣です。大量の銅剣をそのままにしておくと危険です。いつ大和に災いをもたらすかも知れません。そこで、出雲側を大和と同等に扱うという条件で納得させて平穏に埋めさせたのだろうと、吉野先生は考えていらっしゃいます。

## ゲーターサイの謎を解く

三重県伊勢市の東方海上、というよりも愛知県の伊良湖岬に近いところに神島と呼ばれる島があります。元日の夜明け前に、島の東側の海岸で行なわれるゲーターサイで知られる島です。

神島ではこの祭の前日、すなわち大晦日に豆撒きが行なわれます。皆さんはずいぶんおかしな風習だと思われるでしょう。しかし、旧暦では正月の寅の月から春になるので、その前日は太陽暦でいう立春の前日、すなわち節分と同じと考えれば、それなりの理屈が通っており、不思議というほどのことはありません。

さて、ゲーターサイの内容ですが、まず堅いグミの木の枝で丸い輪を作り、白紙で巻いて白色の輪にします。元日の早朝、これを大勢の男性が先の尖った竹（註④）で叩き、空高く突き上げます。「あわ」と呼ぶこの輪は「日輪」ともいい、祭でも「天に二日なし」などといいますので太陽と見なしているわけです。

ではなぜ擬似太陽を作ってそれを突くのでしょう。仔細に検討してみますと、「あわ」は白くて丸くて堅いことから、易でいう六白金気の乾（天）に相当します。

陰陽思想では旧正月からの春は甲乙の木気です。秋の金気の猛威で殺された草や木が再び芽を出し、花を咲かせる季節なので、春に木気が割り当てられたことは理解できます。

この木気の春を順調に定着させるために、「金剋木」の理によって、その順調な進展を妨げる金気の事物を排除しておく必要があるのです。そういうわけで元日の前日に豆撒きをするのですが、この大豆もまた白くて丸くて堅いのです。つまり尖った竹で突き上げられる「あわ」と同様、六白金気の乾（天）に擬せられているのです（註⑤）。

大豆は火熱で殺して鬼と名付けて屋外へ投げ捨てるか、さもなければ食べてしまいます。食べるのは陰も形もなくなる徹底的な殺し方です。このように前日の豆撒きに続いて、元日は白くて堅い金気の象徴「あわ」を竹で突いて殺します。

また、祭の前日にミカンを茅の葉で固く縛ったもの（モーロといいますが、意味不明）が島内全戸に配られます。種子のある果実（ほとんど金気の秋に結実し、種子は堅い殻に包まれています）は金気とされているので、茅の葉で縛るのは金気の活力を封殺する意志を表わしています。これを配るときの挨拶に「福の神がまいりました」といいます。つまり、金気の鬼を縛りつけ、木気の春を安泰にして五穀豊穣（漁師には大漁と海上安全）をもたらしてくれるのが福の神と考えられているのです。

さて、ゲーターサイという呼び名のことですが、地元の神島では意味不明になってしまっています。しかし、吉野先生は「迎太歳（註⑥）」だろうとおっしゃっています。ゲーターサイの真の意味を読み解いたのは吉野先生ただ一人なので、残念ながらこのことは広く世に知られるまでには至っていません。

註①韓国・朝鮮語では「火」のことを「プル（pur）」といい、「赤」を「プルク（purk）」という。

註②昔の人には常識で、わざわざ説明する必要がなかった。「所謂」とはそういう意味合い。

註③斎場のこと。

註④ゲーロー竹というが意味不明。

註⑤小さな豆なのに大豆というのは天が無限大だから。

註⑥木星は公転時間が約十二年なので、十二支の一巡と合致し、別名「歳星」と呼ばれる。この木星とは反対方向に回る架空の星を想定し、これを「太歳」という。この星が北にある年が子年。来年は卯年なので東の方角に回座する。

# 日本昔噺桃太郎伝
## 吉備津彦命

柿本光明

「むかしむかし、あるところに、爺と婆がおりましたとさ。ある日のこと爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行きました。――やがて川上からひと抱えもある滅法大きな桃が、ドンブリコッコ、スッコスッコと流れて来ました」

明治二十八年（一八九五）に、巌谷小波が編集した『日本昔噺』に登場して一躍脚光を浴びた「桃太郎」の出だしである。

婆さんは大きな桃を拾って家へ帰ると、爺さんの帰りを待ち、それを包丁で割ろうとしたとき、その中から可愛い赤ん坊が飛び出てきたのだ。

そして「私は決して怪しいものではありません。実は天津神様から、御命を賜って来たのです。そなた衆二人がこの年頃、子供がないと嘆いているのを、神様も不憫に思し召し、すなわち私を授けるほどに、わが子にして育てよとのことです」と朗らかに述べた。やがて彼は姿も美しく勇気を持った若者に成長した。

時季になると、岡山駅などで特産品として「桃」を売っている。岡山県には弥生時代（異論も多いが、通説では紀元前三百年～紀元後三百年）の遺跡が多くある。そんな中、前山遺跡や門田遺跡からは炭化した桃の核の半分が出土しており、かなり古くから桃が存在していたことが判っている。発掘された桃の核は博物館に展示されているので、いつでも見ることができる。当時のものは野性のためか、今のものと比べると大分小さい。

日本の古代史をまとめた『古事記』や『日本書紀』に、愛妻のイザナミの死を悼んで黄泉国を訪れた夫のイザナギは、やがて妖魔に追われることになるのだが、その時彼は桃の実を投げて逃れたと書いてある。桃に魔除けの力があったことをこんな形で伝承しているのだ。興味を引くのは、それほど古くから日本には桃が存在していたということである。桃は鬼や邪気を払うものとして中国でも珍重され、イザナギが妖魔を追い払うために投げつけたのは、そのためであったのかも知れない。

桃太郎が十五歳になったある日、「この丑寅（北東）の方の遥か海の向こうに鬼の住む島があり、鬼心よこしまにしてわが天津神の御教えに従わず、この葦原の国に仇をなし、たみくさを取り喰らい、宝物を奪い取る世にも憎らしき鬼どもを只今より出陣いたし、彼奴を一挫に取り押さえ、貯えている宝の数々、残らず取り返して帰る所存であります。何卒この儀お聞き届け下さい」と爺と婆に申し出た。

爺も婆も一時は肝を潰してしまったが、それでも間もなく「皇国の安寧を計るがよい」といい、二人は貯えておいた黍で団子を作って与えた。いよいよ桃太郎は旅に出た。

すると犬が現われ、猿が現われ、雉が現われ来てお供をしたいというのだ。桃太郎は黍団子を与え「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と教えられて仲良く海を渡り、鬼征伐に向かったのである。

やがて前方に鑿で削り取ったような険しい岩があり、その上には鉄の門を巡らせた島があるのを発見した。これがまさに人々に恐れられた鬼ヶ島であった。

これを見た雉が飛び立っていった。「やあやあ、この島にいる鬼どもよく聞け。今ここに天津神の御使い、桃太郎将軍が征伐のために出向賜う。命が惜しくばすみやかに角を折り、宝物を捧げて降参せよ。もし歯向かうならば、かくいう雉をはじめ、犬、猿の猛将が日頃鍛えた牙にかけて片っ端から汝らを噛み殺してくれるぞ」と大声で叫んだ。

するとこの島の悪鬼どもはこれを聞いて大いに笑い、「こしゃくな野雉め、征伐呼ばわり片腹痛い、この鉄棒の味をみよ」と虎の革のふんどしを閉め、飛びかかって打ち降ろす。

ついに決戦が始まったのだ。桃太郎と家来たちは勇敢に戦いに挑んでいた。鉄棒を振りかざして抵抗してくる鬼たちへ犬・猿・雉はそれぞれの特技を活かして攻めたてた。

先方は寝耳に水、こちらはかねてより計画通り。寄手に七分の強みあれば、敵に十分の弱みがある。さしもの鬼どもも防ぎかね、みるみるうちに追いまくられて、海に溺れて死ぬものもあれば、岩に落ちて砕け死ぬものもあり、とうとう鬼の頭領は宝物とともに自分の角を折って差し出し降参してしまったのである。

桃太郎はこれを見て「命ばかりはお助けとは、面に似合わぬ弱い奴だ。その方は永い間、多くの人間をあやめる罪あれば、所詮生かしておくわけにはいかぬ。是より連れて帰り、法の通り首をはね、瓦となして屋根の上にさらすから、のがれぬところと覚悟いたせ」と、縄をかけて猿にこれを引かせ、また犬と雉には鬼がぶん取っていた宝物、打出小槌、如意の宝珠、珊瑚、たいまい、真珠のたぐいを大きな箱に入れて担がせ、

再び船に乗って、めでたく凱旋したとさ。めでたしめでたし。

誰もが知っている『昔噺桃太郎』はそれで終わるのだ。

しかし桃太郎はなぜ黍団子を持って旅に出たのであろうか――。

「吉備」という名は、岡山県の古代の名称である。『古事記』の「国生み神話」によれば、阿波国（粟＝徳島県）や小豆島（香川県）という五穀の名がつけられた国や島が誕生したころに生まれたのが「吉備児島」である。後の備前・備中・美作それに広島県東部の備後を合わせた地域では黍を多く産していたのだろう。そんなところから国の名も吉備とつけられたと思われる。

黍には「気に活力を与え、五臓の働きを助け、熱性疾患によい」とも「気血の働きを旺盛にして、身体中に精気をゆきわたらせる」ともいわれて、なかなか薬効がある食べ物である。おそらく黍団子は、吉備国を中心としたところで、古代から食べられていたに違いないと思う。

岡山県の地図を広げてみると、今の平野部は古代にはほとんどが海で、山と呼ばれているところが島であったと考えられる。そうしてみると、神南備山（神の山）として名高い吉備中山も昔は島であったと考えられる。その麓には仁徳天皇が創建したと伝えられる吉備国の総鎮守、吉備津神社がある。いうまでもなく、この神社の祭神は吉備津彦命である。

当時、吉備津彦命はその麓の茅葺宮に住んで吉備国の統治にあたっていたのであろう。今の岡山市足守大井地区に、妃に迎えた百田弓矢比売命の名に因んだと思われる「百田」「弓矢」等の地名が残っている。

この『古事記』や『日本書紀』に載っている者に、岡山県と縁の深そうな『昔噺桃太郎』を重ね合わせてみたくなるのが本音であろう。

桃太郎を吉備津彦として見れば、その従者であった「犬」は犬飼健命、「雉」は留玉臣命で、ともに随身として吉備津彦神社に祀られているのである。ただ二人は神ではないので「随神」ではなく、「随身」といっている。

もう一人の「猿」を表わす楽々森彦命は、今の岡山市足守地区に住んでおり、そもそも葦守山（足守山）で国郡を守っていた。その娘が後に吉備津彦命の妃となった高田姫で、ともに鼓神社（足守高田）に祀られている。こうしてみると『昔噺桃太郎』の人物像とピッタリと合うのだ。

では『昔噺桃太郎』に出てくる鬼についてはどうかと考えたくなる。これについては人々に恐れられていた温羅という者がいたのだ。温羅は備中国新山（総社市黒瀬）に朝鮮式山城の「鬼ノ城」（総社市奥坂）を構えて、その近くの岩屋山に楯（砦）を築いた。そして麓の阿曽郷（総社市阿曽）の阿曽娘を妻に迎え、近くの岩屋（総社市岩屋）に鬼の岩屋という住居を持っていたのである。

さていよいよ戦闘開始となった。吉備津彦命と温羅は矢を放ち合う矢合戦が始まる。彼らが放った矢が落ちたという矢谷があり、箭坂（岡山市八坂）、矢掛（小田郡矢掛町）などというところもある。また、足守川のほとりには吉備津彦命と温羅の放った矢が絡み合って落ちたという矢喰宮（岡山市高松田中）がある。

やがて温羅はその目を射貫かれて血を流して血吸川を生んだ。川下に鮮血に染まった「赤浜」というところがあるのはそのためである。さらに血吸川へ逃げ込んだ温羅と吉備津彦命との間では霊力合戦が行なわれ、鯉に変身した温羅を鵜に姿を変えた吉備津彦命が捕えて喰ったという鯉喰神社（倉敷市矢部）があり、刎ねられた首を晒されたという首村（岡山市首部）もある。

吉備津彦命の活躍と軌跡を『昔噺桃太郎』と重ね合わせてみると、そこにさまざまな点で奇妙な一致が見られる。そんな不可思議なことを追っているうちに、いつしか私の心は時の壁を超え、伝説の壁を超えて彼らが生きていた古代へと飛翔し始めていた。吉備津彦命はすでに熾烈な古代の歴史の中で生き始めていたのである。つまり「桃太郎伝説」がそれである。

物語の中心におかれた吉備津彦命が「桃太郎」となった理由は、吉備国においてよく食されていた「桃」が「百」と解釈され、多くの男の中の男ということになったのだ。

吉備国から見て鬼門（丑寅）の方向には、出雲国が存在しており、これを押さえるために陰陽道による反対側の方向の力を使わなくてはならない。戌・酉・申の力を使わなくてはならないということだ。つまり、犬飼健（犬）が吉備津彦命に従うまず決まり、次いで留玉臣（雉）、楽楽森彦（猿）という従者が決まった。そして鬼門に存在する出雲国を温羅という鬼に象徴させたのだ。出雲から鉄を得た史実を「金銀財宝」を得たことに、また「国魂」を得たのを「宝珠」を得たことに置き換えた。

すなわち「桃太郎伝説」は、星の運行から判断された生活規範を決めた、隠された陰陽道物語なのである。

# 石田三成の書状

## ―福山城伏見櫓の真実―

小林定市

福山を通る人々に最も目に映りやすい文化財は、重要文化財の福山城伏見櫓だが、この櫓は徳川秀忠が伏見城の松の丸から移築させたと伝えられる建物である。

伏見城はもともと京都伏見の指月の丘に豊臣秀吉が築いた城であったが、慶長元年（一五九六）の地震で城は崩壊。秀吉は直ちに場所を変え、指月の北東約五百m先にある木幡山に、木幡山城（桃山城）の再建を進め、翌年天守閣を完成させている。

慶長五年（一六〇〇）七月、木幡山城は関ヶ原の合戦の前哨戦で西軍の攻撃を受けて炎上したのであるが、戦後、徳川家康によって再建が進められた城である。

福山では希望的な願望からか、伏見櫓は秀吉が築いたとする説が昔から有力であった。すると福山の伏見櫓は炎上を免れた櫓だったのであろうか。現在まで、伏見城全体が確かに炎上したとする史料はまだ明らかにされていない。

そこで築城主を知る手掛かりとして、間接的な史料であるが、築城主が城の中に用いていた家紋がある。

秀吉が伏見城で用いていた家紋は桐紋で、現在再建された伏見城天守閣には、「文禄三年（一五九四）」の陽刻銘が刻まれ、透かしの桐紋が入った銅製の鼎が展示されている。また、京都大原の天台宗寂光院の庭にある鉄製の置灯籠「伝豊臣時代の伏見城中の灯籠」にも透かし桐紋がある。

ところで、伏見城から福山城に移転した伏見建造物群の家紋について、

『水野家築城記』は

「伏見御殿一・風呂屋一・石貳ツ共同時伏見ヨリ拝領ノヨシ葵御紋アリ」

と記している。また『備陽六郡志』は「御殿、箱棟に葵の御紋付」と記し、『福山志料』にも「御風呂屋、葵の御紋有」とあり、前記の三史料はいずれも建物に徳川家の家紋があったと記している事から、関ヶ原の合戦後に徳川家康が伏見城を再建させた事を想定させる建造物である。

豊臣秀吉が死に、次いで秀吉に信頼されていた前田利家が死ぬと、老獪な徳川家康は誓約を無視して豊臣恩顧の大名を籠絡服従させ全権を握ろうとしていた。

慶長五年（一六〇〇）六月、上杉景勝と家康の関係が決裂すると、家康は上杉討伐の大軍を率いて関東へと駒を進めるのであるが、留守中の異変を予想し、伏見城を鳥居元忠等に守備させた。

一方、石田三成は家康の東征を機に挙兵し、西国大名の結集を計って伏見城を攻撃した。その西軍に毛利軍は加わるのであるが、攻撃した毛利方の記録に、

「慶長五年七月、鳥居彦右衛門尉伏見籠城に付、大阪より御人数差向けられ候節、御当家より吉川広家（富田月山城主十四万石）様、久留米（小早川）秀包（久留米城主十三万石）様、毛利元康（神辺城主、深津王子山にも城を築く）様、堅田兵部少輔元慶差向けられ候節、俊久（小野外記允）御人数に加はり、八月朔日落城の節討死仕り候」

と『閥閲録』にある事から、備後南部の軍勢は伏見城攻撃に参加し、同城を落城させていたのである。

石田三成は伏見城攻撃の督励に伏見に来ていたが、八月五日、伏見から近江佐和山城に帰城すると、当日早速信濃上田城の真田昌幸に長文の書状を送っているが、その一節に

「一、先書にも申し候伏見の儀、内府（家康）留守居の為、鳥居彦右衛門・松平主殿・内藤弥二右衛門父子、千八百余騎楯籠り候。去月十九日より取巻き、当月朔日未の刻、無理に四方より乗込み候為、一人も残らず討果し候。大将鳥居首は、御鉄砲頭鈴木孫三郎討捕り候。しかして城内ことごとく火をかけ、焼討ちに致し候」

と『真田軍功家伝記』は伝えている。三成は翌六日にも続いて昌幸宛に次の長文の書状を送っている。

「一、先書にも申し候大阪西丸の家康留守居の者、五百余り居り候を追出し伏見城に遣わし、西丸へ輝元（毛利）を移し、其以後伏見城鳥居彦右衛門大将にて千八百余り置き候を、各申し談じ、去る朔日に四方より乗破り、一人残らず打取り城中御殿をば、此の間雑人原踏荒らし候間、ことごとく火を懸け一宇も残らず焼払い候事」

と『古今消息集』は伝え、七日には常陸水戸の佐竹義宣にも前書と同様の書状を送っている。すなわち

「一、伏見の城に右の者共置候へば、済まざる事に候間、去る朔日四方より乗入れ、籠り居り候者一人も残らず討果す、殿中此の間雑人原踏み散らし候間、一宇も残らず焼捨て候事」

と『上杉氏白河軍記』にもあり、これらを見ると、秀吉が築いた伏見城は、石田三成によって完全に焼却されていたのである。

その後、家康は伏見城の造営に着

手した様で、「義演准后日記」の慶長六年（一六〇一）三月十五日の条には、「伏見城へ内府御移徒云々」の記述がある。以上、前記の史料が残されていた事から、伏見城から福山城に移築された諸建造物は、徳川家康が関ヶ原合戦後に再建した建物であったことがわかる。

## 事務局日誌

一〇月一七・一八日（土・日）
一泊旅行「燃える秋　但馬・丹後を味わう旅」参加四一名。
台風大接近で実施するかどうか最後まで迷うも、実施して大正解。初日の竹田城登山では、まる二時間半にわたってまったく雨が降らなかった。大手門を抜けたあたりから歓声があがる。「すごいすごい」の声があちこちから。山頂は神々しいまでの雰囲気に包まれ、参加者全員感動する。
二日目も台風一過で好天に恵まれ、帰りの車中も大歌唱大会で大いに盛り上がった。二日間で、用意した六升の酒（一升は三谷俊文さんの差し入れ）すべてが消えたのも一泊旅行初のことだった。
一〇月二四日（土）
第十回郷土史講座「古代の山城について」。
講師七森義人さん。参加四七名。多数の参加で資料がぎりぎりに。
一〇月三一日（土）
「『古事記』を読む」参加二四名。
一一月一日（日）
古墳講座Ⅴ「新発見考古速報展発掘された日本列島98」見学会。参加一五名。部会長・副部会長とも遅刻、参加者はプンプン。
一一月一日（日）
バス例会準備のため比熊山城の下草刈りに。参加九名。
一一月月五日（木）
役員会参出席者一七名。会則改正原案などを検討、激論になる。
一一月八日（日）
バス例会「三次市の史跡めぐり」参加五二名。
一一月一三日（金）
行事案内発送作業。参加八名。
一一月二一日（土）
「『古事記』を読む」参加二〇名。
一一月二一日（土）
「『備後古城記』を読む」参加一九名。
一一月二二日（日）
「吉備磐座紀行Ⅱ」参加一六名。
一一月二八日（土）
第一一回郷土史講座「石成庄と正藤山城ついて」。
講師坂本敏夫さん。参加四〇名。
※会場はすべて福山市中央公民館。

## 『山城志』の締め切り迫る！

**一六号の原稿最終締め切りは**
**一二月三一日(木)年内到着分まで**

原稿は原則として一人一本に限ります。近年は投稿が増えて、すべて掲載すると、予算を大幅に越えてしまう場合が出てきました。そこで今回から内容審査の上採否を決定します。投稿されても掲載できない場合がありますので予めご了承下さい。
版形はB五サイズで、縦書き二段組です。ただし、一覧表などは横書きでもかまいません。
本文はタイトルページを除けば、「三二字×二二行×二段」でちょうど一ページ。ワープロ原稿の方はこれに字数を設定してください。
四〇〇字詰原稿用紙ですと一ページは約三枚半になります。掲載ページ数は最大二〇ページ（四〇〇字詰原稿用紙七〇枚）まで。
写真・図版も掲載可ですが、費用が余分にかかりますので、枚数は常識の範囲でお願いします。皆様の力作を期待しております。
なおワープロの方で、MS－DOSのある方は（分からない方は事務局の平田まで問い合わせ下さい）テキストファイル化したフロッピーも合わせて提出してください。

## 会報八七号の原稿募集

**原稿締切　一月一六日(土・必着)**

なるべく早めにお送りください。また原稿は一号につき一人一本に限ります（厳守）。
原稿は本文「一行一六字×一二〇行」でちょうど一ページです。以下三二行毎に一ページの一段になります。四〇〇字詰原稿用紙を使用する場合は、下四字分を空白にして、一行一六字にして書いて下さい。皆様の力作を期待しております。
**今回は予算の都合上一ページ以内でお願いします（依頼原稿は例外）。また、こちらで予定したページ数を超える場合には、今まであまり書いていない方を優先し、常連の方に掲載をご遠慮願う場合もあります。**

## 平成十一年度会費納入のお願い

備陽史探訪の会の運営は皆様の会費によって支えられています。同封の郵便為替で平成十一年度の会費を十二月中に納入下さるようお願い申しあげます。

| | |
|---|---|
| 一般会員 | 三〇〇〇円 |
| 夫婦会員 | 四〇〇〇円 |
| 大学生等 | 二〇〇〇円 |
| 高校生 | 一五〇〇円 |
| 小・中学生 | 一〇〇〇円 |

## 特別歴史講演会
（第一二回郷土史講座）

# 大伴旅人とその周辺

大伴旅人は万葉集を編纂した家持の父として著名です。自身も万葉集に七十余首を残す歌人であり、その歌の多くは太宰帥として四年間太宰府に赴いたときに作られたものです。着任後、すぐに愛妻大伴郎女を亡くしたことや、筑前守であった山上憶良、沙弥満誓らとの文学的交流が、旅人に多くの歌を作らせ、いわゆる「筑紫歌壇」を形成したといわれています。

旅人の作品のうち、天平二年（七三〇）大納言に昇進して帰京する際、鞆の浦で詠んだ歌はとくに有名です。

この歌は斎藤茂吉編『万葉秀歌』（岩波新書赤版）にも採り上げられており、茂吉は「詠歎が籠っていて感深い歌である」と激賞しています。

「吾妹子が　見し鞆の浦の　むろの木は　常世にあれど　見し人そなき」（巻三／四四六）

（わが妻が見た鞆の浦のむろの木は今も変わらずあるが見た人「妻はもう」はいない）

大伴氏は古代からの名族（旅人はその本流。平城京遷都後、佐保に居を構えたので「佐保大納言卿」と称された）でしたが、藤原氏の隆盛とともに徐々に衰えていきます。政治面では、旅人もその子家持も藤原氏との権力闘争に明け暮れたの一生だったのです。

本年度最後の郷土史講座では、こうした大伴旅人の生涯と万葉の時代を郷土の歴史にからめながら戸田先生に存分にお話しいただきます。

**【実施要項】**

**《日時》**一二月一二日(土)午後三時
**《会場》**サンピア福山
**《講師》**戸田和吉先生
（福山市教育委員会）
**《参加費》**無料

## 今後の定期講座

**【『古事記』を読む】**

**日時**　一二月一九日(土)午後二時
　　一月一六日(土)午後二時
　　（第三土曜日に変更）
**会場**　中央公民館会議室
**座長**　平田恵彦さん
**資料代**　一〇〇円程度

**【『備後古城記』を読む】**

**日時**　一二月一九日(土)午後七時
　　一月一六日(土)午後七時
**会場**　中央公民館会議室
**座長**　出内博都さん
**資料代**　一〇〇円程度

# 忘年会で盛り上がろう

今年もいよいよ忘年会のシーズンがやってきました。一年の憂さを晴らす絶好の機会です。

世間では、やれ不景気だの、やれ世紀末だの嫌な話も多いですが、備陽史探訪の会は明るく朗らかに元気よくいきたいものです。

会員の皆様のご出席を心からお待ちしております。

**【実施要項】**

**《日時》**一二月一二日（土）
　午後五時三〇分～七時三〇分
**《会場》**サンピア福山
　福山市緑町九―七
　☎〇八四九(二二)三一三一
**《会費》**
　六〇〇〇円
　（税込み・和洋食・飲み放題）

♣忘年会ご出席希望の方は先に郵送したハガキ、または電話で事務局までお申し込み下さい。勝手ながら準備の都合上一二月九日（水）までに願いします。

♣当日、午後二時三〇分に福山駅北口から送迎バスが出ます。これは当日開催される特別歴史講演会に合わせたものです。もちろん忘年会終了後も福山駅までお送りします。

♣忘年会ご出席の方はなるべく講演会にもご参加ください。

# 平成十一年総会の日程決定

来年のことをいうと鬼が笑う、とよくいいますが、たとえ鬼が笑っても、今回の総会は会則の全面改正という重要議題がありますので、日程と会場だけは早めにお知らせします。この日は空けておいて下さい。できるだけ多くの会員の皆様にご出席いただきたいのです。詳しくは次回行事案内でご連絡いたします。

**【実施要項】**

**《日時》**平成一一年一月二四日(日)
**《会場》**遺族会館
　福山市丸之内一―九―七
　☎〇八四九―二二―〇〇五〇
**《時間》**
　①特別郷土史講座
　　一時三〇分～三時
　②平成十一年度総会
　　三時三〇分～五時
　③新年宴会
　　五時三〇分～七時三〇分

## 《編集後記》

旅に明け暮れた一年でした。いつの間にか一年が過ぎてしまったという感じです。今年は本当に速かったです。

（磐座亭主人）

備陽史探訪の会事務局〒七二〇―〇八二四
福山市多治米町五―一九―八
☎〇八四九(五三)六一五七